

学位論文審査の結果及び学力の確認の結果の要旨

学位申請者氏名	平井 博一郎		
学位論文名	歯科補綴学実習におけるインプラント埋入実習導入効果の検証 (Evaluation of educational effectiveness of Oral Implantology programs in prosthodontics hands-on course)		
論文審査委員	主査:	松本歯科大学 教授	亀山 敦史
	副査:	松本歯科大学 教授	黒岩 昭弘
	副査:	松本歯科大学 特任教授	倉澤 郁文
	副査:		
	副査:		
学力の確認	実施年月日	2023 年 2 月 22 日	
	試験方法	□ 口答 ・ 筆答	
学位論文の要旨			
<p>【目的】 本学では 2018 年度から歯科補綴学実習Ⅱの全 45 コマのうちの 3 コマに導入し、2020 年度からは当該学年の全受講者を対象にアンケート調査を行っている。本研究は口腔インプラント学実習の教育効果の検証と教育内容の問題点の抽出を目的として、2020 年度と 2021 年度の本実習受講者について調査したものである。</p> <p>【方法】 2020 年度の本学第 4 学年学生 85 名（男性 59 名，女性 26 名）および 2021 年度の本学第 4 学年学生 78 名（男性 54 名，女性 24 名）を対象とした。まず下顎右側第二小臼歯，第一大臼歯，第二大臼歯の 3 歯欠損の患者を想定した顎模型（E7-X.1137，ニッシン）を用いて診察・診断を行い，次に下顎右側第二小臼歯から第二大臼歯相当部の欠損部に対してインプラント窩を形成，直径 4.3mm，長さ 13mm の疑似インプラント体（Replace tapered, Nobel Biocare）を 2 本埋入した。3 歯欠損の患者を想定した顎模型での診察・診断後，疑似インプラント体を埋入させた。埋入実習終了後，3 項目のアンケート調査を行った。それぞれの項目に対して 1（肯定的）から 5（否定的）までの 5 段階の評価を学生が自ら行った。なお各項目において，3（どちらでもない）以下に評価した学生に対してはその理由を同時に収集した。このほかに，対象者全員に対して実習に追加して欲しい項目，感想に関する記述式の回答を収集した。年度による学習効果の差を検証するため，統計解析には independent samples t-test を有意水準 5%にて用いた（JMP pro ver.16）。</p> <p>【結果および考察】 有効回答率は 2020 年度で 94.1%，2021 年度で 100%であった。インプラント実習の概要に関する理解度についての質問（質問 1）について，概要を「よくつかめた（評価 1）」および「つかめた（評価 2）」とした学生の合計は 2020 年度 93%，2021 年度 94%であった。一方で，評価 3 以下の学生の主たる理由は「難易度」および「実習時間の短さ」に対しての不満であった。このことから，本実習がインプラント治療の概要を理解するために有効出る可能性が示唆された。</p> <p>興味に関する質問（質問 2）について，「興味をととても持てた」とした学生は 2020 年度で 49%，2021 年度は 59%であり，強い興味を示した学生が 2021 年度に多かった。さらに「興味をととても持てた」，「興味を持てた」とした学生の合計は 2020 年度 90%，2021 年度 95%となり，いずれの年度も 9 割以上の学生がインプラントに興味を示していた。一方，評価 3 以下の学生は 2020 年度 10%，2021 年度 5%であり，「手技が難しかった」，「外科処置をしたくない」との意見があった。</p>			

(様式第 15 号)

卒後に欠損補綴の治療選択肢としてインプラント治療を自ら取り入れたいか、との質問（質問 3）で、「是非取り入れたい」、「取り入れたい」とした学生の合計は 2020 年度 78%、2021 年度 80%となり、いずれの年度も多く多くの学生がインプラント治療の導入に前向きな意見を持っていた。一方、評価 3 以下の学生は 2020 年度 22%、2021 年度 20%であり、その理由は「手技が難しかった」、「トラブルが怖い」、「必要性を感じない」などであった。

それぞれの質問項目について 2020 年度および 2021 年度の結果を比較した結果、いずれの質問項目についても有意差は認められなかった（質問 1 : $p=0.272$, 質問 2 : $p=0.136$, 質問 3 : $p=0.316$ ）ことから、両年度で教育内容の均一化を図ることができていたものと考えられた。

学位論文審査結果の要旨

本研究は、歯科補綴学実習において欠損歯顎模型にインプラント窩の形成とインプラント体埋入のシミュレーションを取り入れることによる口腔インプラント学への教育効果をアンケート調査により検証したものである。講義での学習効果は試験成績などで評価が可能であるが、模型によるシミュレーション実習の学習効果を評価することは難しい、そこで、本研究では 2020 年度と 2021 年度で同じアンケート調査を行い、その比較を行っているところに特徴がある。結果として両年度で有意差を認めなかったことから、学生アンケートにより教育効果を検証することについて、一定の妥当性を示唆している。

本研究で得られた成果は今後の歯科医学教育に寄与するものと考えられ、本論文が博士（歯学）の学位授与に値すると判断した。

学力の確認の結果の要旨

申請者の学士申請論文について、その内容に関する質疑に加え、以下のような項目を中心に口頭による試験を行った。

1. 本研究で用いた統計処理手法（t-test）を用いた根拠
2. 等分散性の検定を行ったか
3. グラフの種類を円グラフにした根拠
4. これまでに発表されている同様のアンケート調査との相違点、本研究の独自性、新規性について
5. アンケートで起こりうるバイアスへの対処法について
6. アンケートを 5 段階評価とした根拠
7. 無記名方式であることから、留年生がいる場合にどのような配慮をしたか

以上の質問に対して、文献的知識を踏まえておおむね妥当な回答が得られたことから、学位申請者は本学大学院博士課程修了者とほぼ同等の知識と学力を有していると判断し、最終試験を合格と判定した。

判定結果

合格

不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を（ ）を付して記入すること。
- 2 学位論文名が日本語で表示されている場合には、英語訳を（ ）を付して記入すること。
- 3 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。

